

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トンにピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2020年は9万8千トンとなりました。

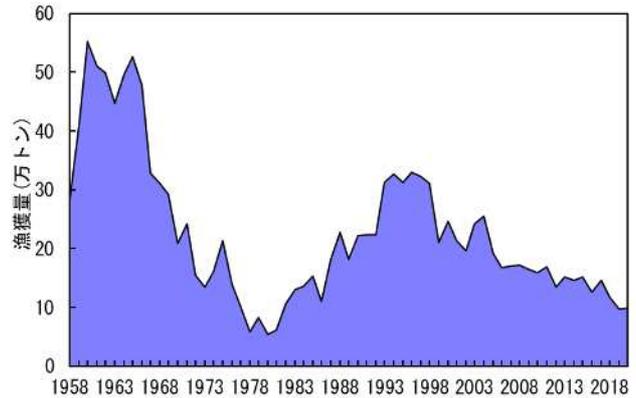


図 全国のマアジ漁獲量の推移

年

2. 県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、4月に縄瀬、五島下、天草西沖、甌西、男女群島でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。5月に男女群島でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。6月に男女群島、串木野沖でマアジ豆、小（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、4月に内之浦沖、野間池沖でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。5月に立目崎沖でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,031トンの水揚げで、前年の101%及び平年の223%でした。

3. 県内の令和4（2022）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：マアジ豆、小（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

6月までの漁獲の主体であった1歳魚に加え、今後は0歳魚も漁獲の主体となることが予測され、直近6月における中型まき網の漁模様から、前年・平年を下回ると考えられます。

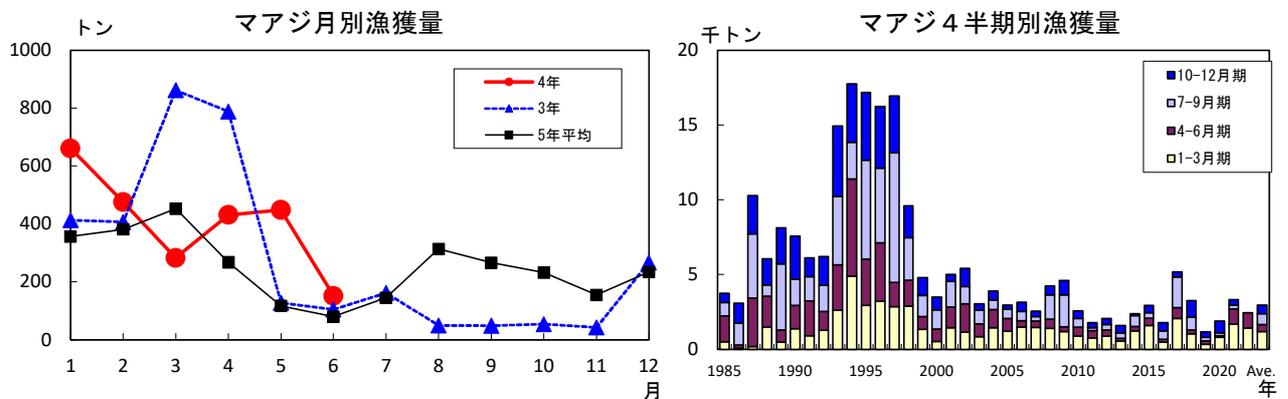


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年6月22日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となり、2020年は39万トンとなりました。

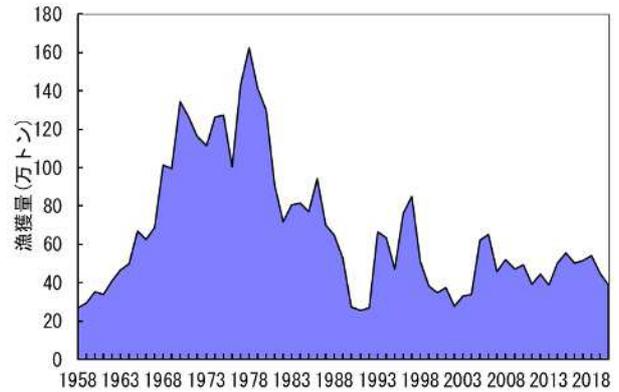


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、4月に男女群島、天草西沖、縄瀬でサバ類大、中、小、仔（0～5歳魚：2017～2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。5月に男女群島、長島でサバ類大、中、小、仔（0～5歳魚：2017～2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、4月に湯瀬でゴマサバ大、中、中小（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）主体の漁場が、内之浦沖、開間沖でマサバ中、小（2～5歳魚：2018～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。5月に屋久島南、湯瀬でゴマサバ中、中小（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）主体の漁場が、開間沖でマサバ中小（3歳魚：2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。6月に屋久島南、馬毛島、湯瀬でゴマサバ中、中小（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で2,849トンの水揚げで、前年の82%及び平年の50%でした。

3. 県内の令和4（2022）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ中、中小（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期6月に漁獲の主体となっていたゴマサバ中、中小が漁獲の主体となると考えられ、直近5～6月のゴマサバ中、中小の漁模様を考慮すると、サバ類の来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

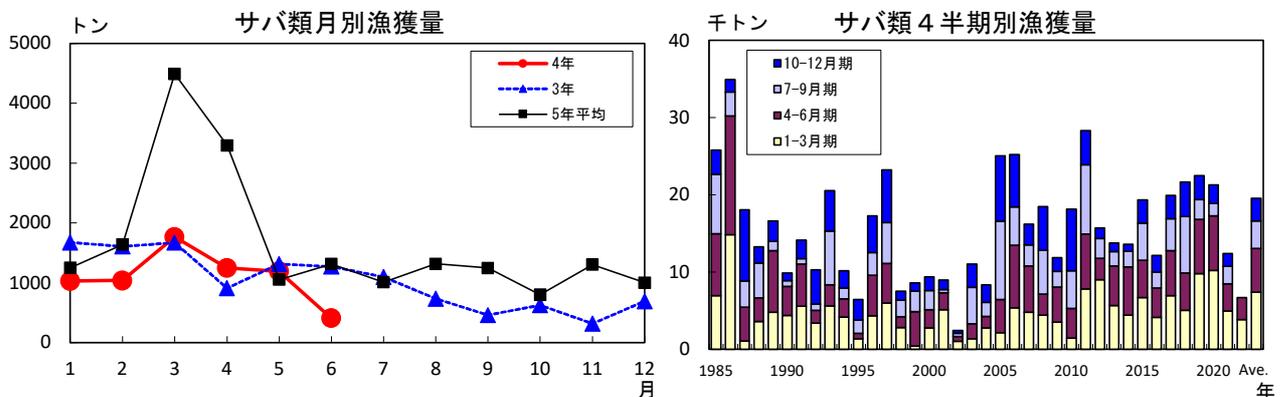


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年6月22日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2020年には70万トンとなりました。

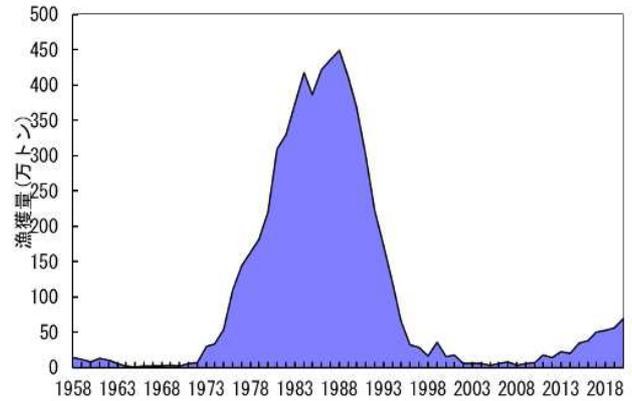


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域・薩南海域とも、まき網の漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、6トンの水揚げで前年の18％、平年の4％でした。

北薩海域の棒受網では、3トンの水揚げで前年の9％、平年の7％でした。

3. 県内の令和4（2022）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（0歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（2022年生まれ）は、前期の漁況が期を通じて低調に推移していることから、今期は前年・平年を下回ると考えられます。

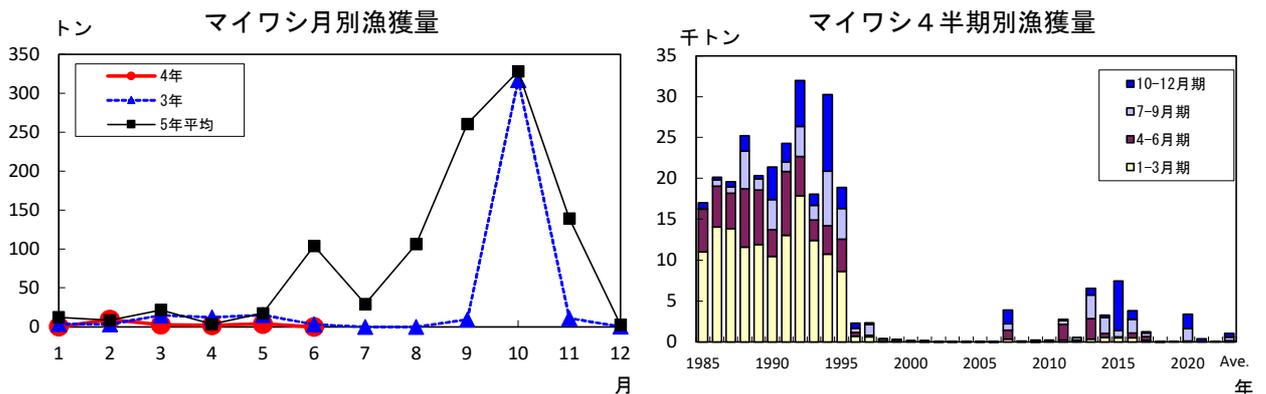


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年6月22日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりましたが、2020年は4万トンと大きく減少しました。

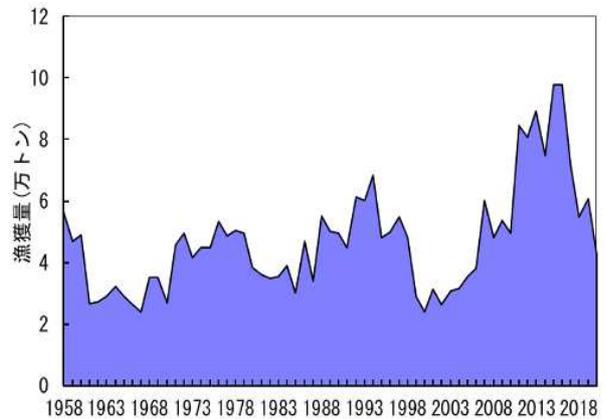


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、4月に甌島周辺、5月に男女群島で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、4月に開聞沖、湯瀬、内之浦沖、立目崎沖、5月に立目崎沖、内之浦沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）主体に324トンの水揚げで、前年の106%、平年の74%でした。

北薩海域の棒受網では、33トンの水揚げで、前年の36%、平年の30%でした。

3. 県内の令和4（2022）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽主体（0歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（2022年生まれ）は、前期の漁況を基に予測すると、今期は前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

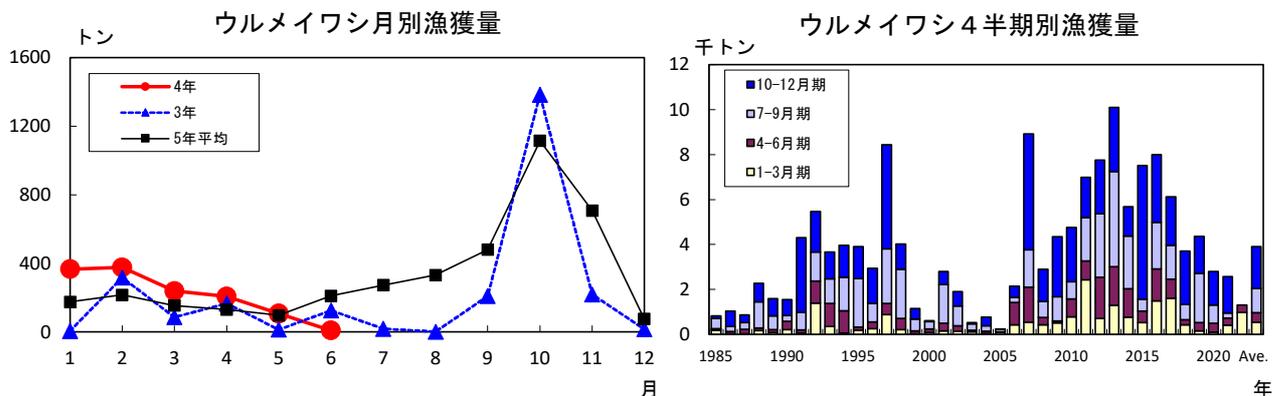


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年6月22日までの水揚量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2020年は14万トンとなりました。

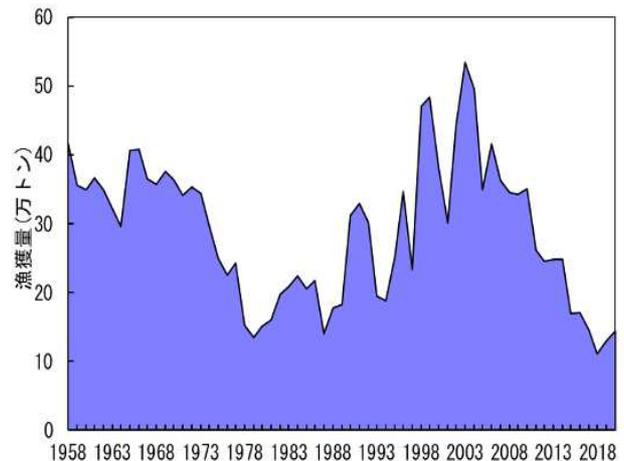


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、6月に阿久根沖、期を通じて八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）主体に342トンの水揚げで、前年の198%、平年の37%でした。

北薩海域の棒受網では、152トンの水揚げで、前年の224%、平年の72%でした。

3. 県内の令和4（2022）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（0歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる小～中羽（0歳魚：2022年生まれ）の漁獲量は、前期の漁況を基に予測すると、今期は前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

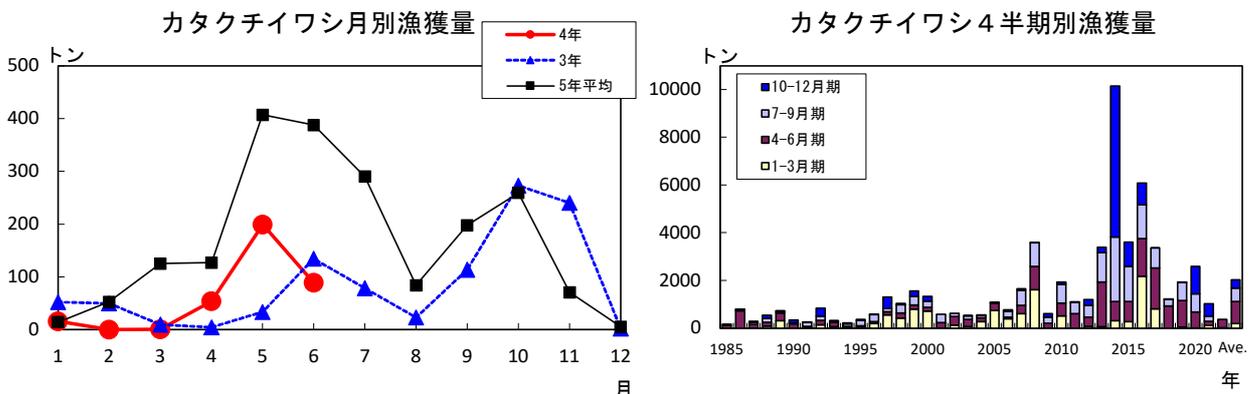
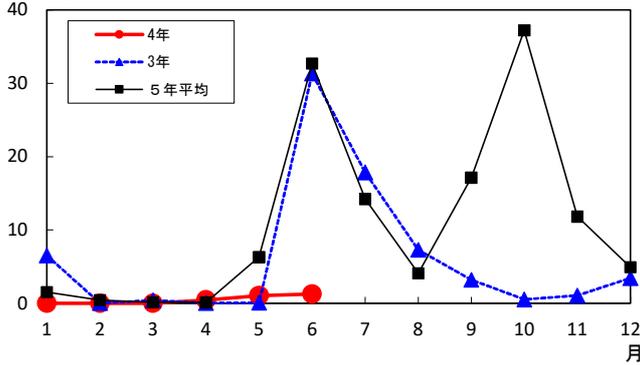


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年6月22日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

トン マイワシ月別漁獲量



百トン マイワシ4半期別漁獲量

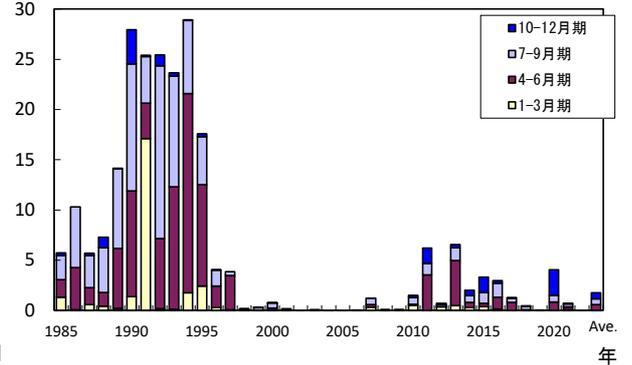
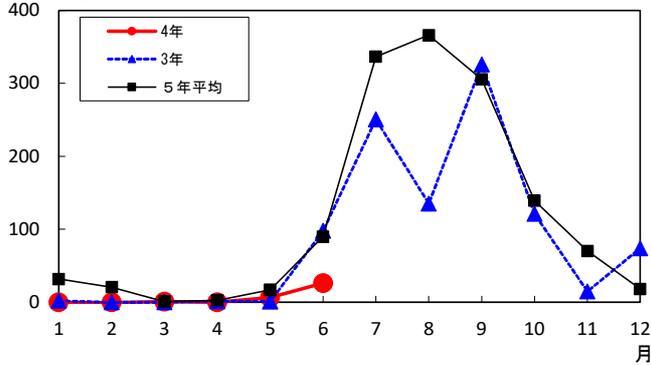


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

トン ウルメイワシ月別漁獲量



トン ウルメイワシ4半期別漁獲量

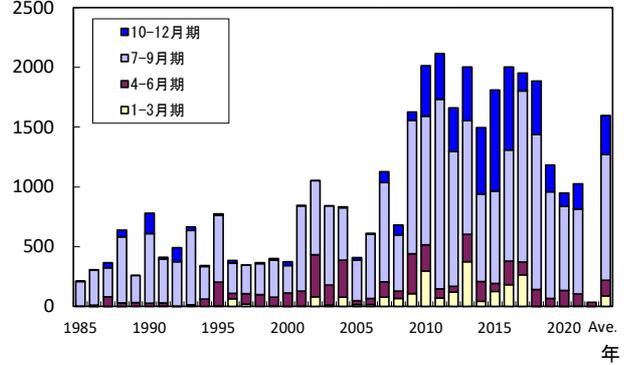
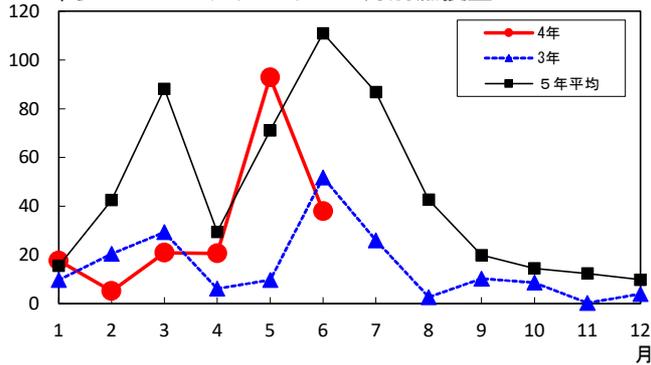


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

トン カタクチイワシ月別漁獲量



トン カタクチイワシ4半期別漁獲量

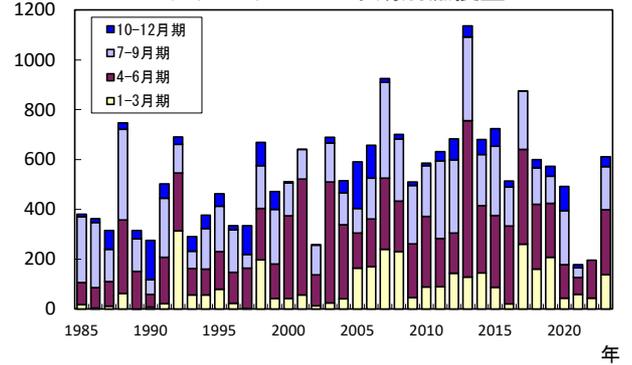


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和4(2022)年6月22日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（ムロアジ、クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉
 県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、1990年の21,700トンピークに急減し、1994年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、2021年は3,017トンとなりました。

4港計のまき網では、臥蛇島でクサヤモロ中小主体の漁場が形成されました。期全体で394トンの水揚げで、前年の48%及び平年の87%でした。

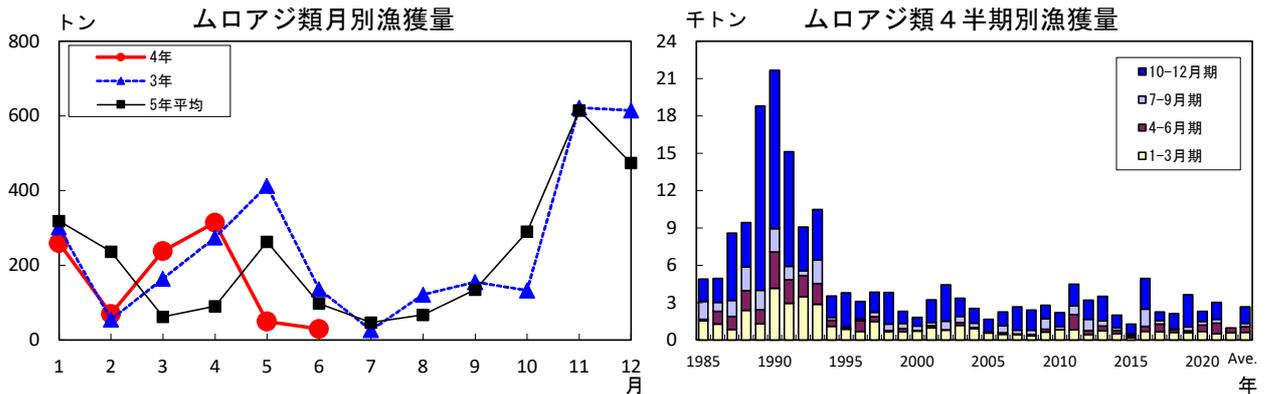


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年6月22日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉
 県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、1989年の5,300トンピークに一旦減少し、1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。2008に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、2021年は416トンとなりました。

4港計のまき網では、主に屋久島南でオアカムロ中、中小主体の漁場が形成されました。期全体で19.1トンの水揚げで、前年の17%及び平年の5%でした。

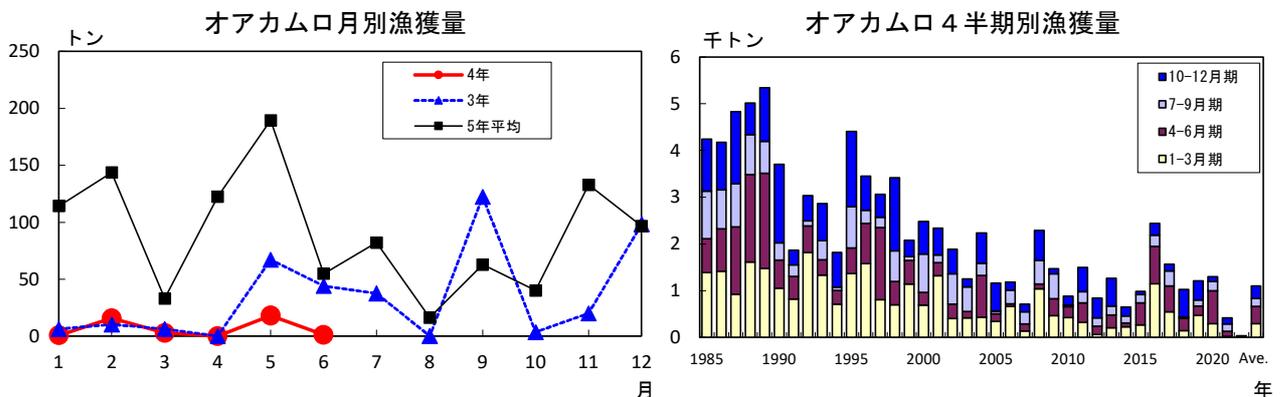


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年6月22日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和4（2022）年4～6月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、1987年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000年から2003年に再度ピークを迎え2003年には3,150トンと最高を記録しましたが、2004年以降は低調に推移し、2021年は176トンとなりました。

4港計のまき網では、串木野沖でマルアジ小主体の漁場が形成されました。期全体で23トンの水揚げで、前年の205%及び平年の34%でした。

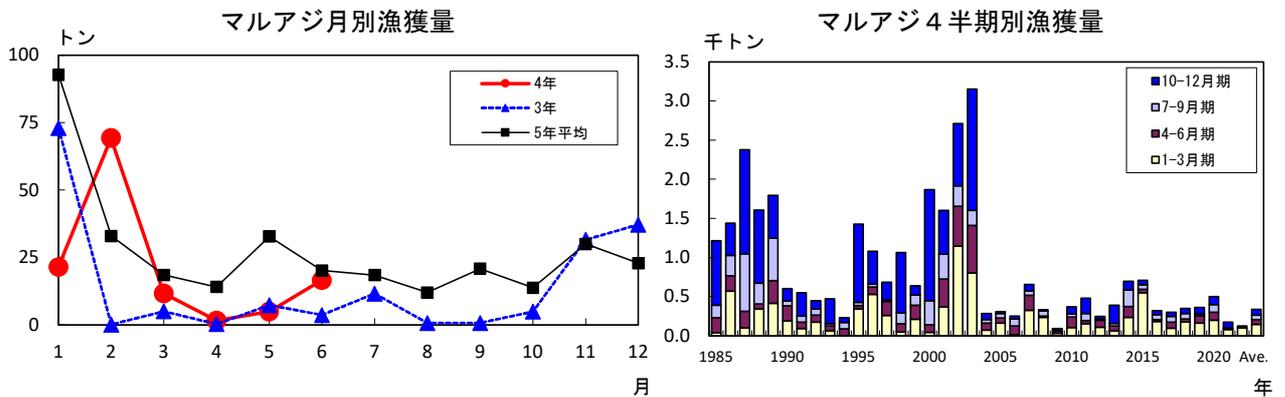


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年6月22日までの水揚げ量を使用